

一人ひとりの一言ひとひには、実はとても大きなものが隠されている。ななやこの人はこんなことを言っていたらどうか、なんてその考えにたどり着いたのだろうか、考えつみるよその言葉の背景まででも知りたくなる。

今回の旅で出会った大切な人たちから、とても貴重な言葉をいただいた。それぞれの言葉は、あの日の時、あの人からしかもらえないものではない、かけがえのないものであった。

どんなにお金をかけても、時間をかけても、あの言葉を、あの時のあの人以外からはもう二度ともらうことはできない。だから「え、その言葉に、大きな意味があるのだ。その言葉」から、わたしは今回の旅を私なりの言葉にしたと思う。

明日死んだら後悔しない。」「いいだ何人の人がこの言葉を口にするようになったらいいか。

私は、残念ながらまたそう思うことができない。でも、そう思えるように生きたいというも思うてる。そんな人生を歩めるといいよ、ほんとになに幸せなことなのだろう。

上海を出る前のわたしは、「この場所から出ていきたい。外で学び、考え、また戻ってきて頑張りたい。」と外の世界に期待を寄せていた。

上海—泉州行きの飛行機はそんな私の期待をよそに、5時間遅れで出発した。

しびれを切らしたお客さんが航空会社の人たちに抗議するのをよそに、わたしは飛行機の離発着を何も考えずただ延々と眺めていた。普段、大学内の敷地から全く外に出ない私は、外の、何もかもが新鮮に思えた。

泉州は暑かった。

上海では薄い長袖を着ている人たちが多く中で、福建省ではもう夏が来ていた。

真央さんとは、3年ぶりの再会。私はいつの間にか、三年前一緒に大連に留学した当時の真央さんと同じ年になっていた。私たちは、変わらない笑顔で、華僑大学の噴水の前で再会を果たした。

翌日の午前中、真央さんの担当する授業を見学させてもらった。

日本語学科三年生の流暢な日本語にやるべしセンターションに驚いた。

教室の一番後ろに座っていた私は、上海よりもかなり暑いのか、それが心地よさにも変わり、眠たくなりました。立ち上がりてキャンパス内を少しだけ歩いてみた。

キラキラと太陽の光を浴びて輝く緑と、すっかり夏の格好をした学生たちの姿を眺めていた。



中国の大学はたくさんあるけれど、どの大学も特色があり、ただキ

ヤンパスを歩いているだけでも発見があり、面白い。  
真央さんの生活に密着した二日間。二人でおしゃべりし、人生観を語った。毎日笑顔で生きていくことが、何よりも親孝行なのかもしれない。



泉州での二日間はあるという間だった。とても居心地のよい先輩の部屋を離れ、廈門での4日間のひとり旅行が始まった。  
何事も、最初はとても難しい。それは知らない土地で予約した宿を探すことも例外ではない。私は重たいリュックを背負い、予約したホステルを探すために3時間以上歩き続けた。  
地図が差していたのは実際のホステルと全く違う場所だった。

オーナーに連絡してやったどりの着いた宿は薄暗いアパートの6階。安全ではないと判断し、私はエレベーターを降りることなくそのまま1階まで下がり、新たに泊まる場所を探すことに決めた。

自然の豊かなアモイを期待していたが、バスを降りて歩いたところは繁華街。上海と変わりないと思いきり手ががっかりしてしまった。ホステルを新たに探さなければならなかったが、時計はすでに午後九時を回っていた。

その口泊まるところが決まっていけないのに、私は冷静だった。そして、なぜか本能的に廈門大学へ向かっていた。大学の周りの宿を探そうと思ったのだ。

私は、どの国でもどんな地方でも大学が大好きである。私は導かれるように、大学行きのバスに乗った。

廈門大学に到着すると、周辺のホステル探しを始めた。

ケータイの地図を見ながら、ホステルに向かう。人なごき、ひとりの男性が話しかけてきた。私が日本から来た留学生だとわかると、自宅からとても近いということと、国際ユースホステルまで案内してくださいました。

なぜか英語で会話をしながら、ホステルの入り口まで案内してくださった。あとから、その方は廈門大学の職員の方であることを知った。現地の方に親切にしてくださいました。私は心が温まることに、勇気も出てきた。



そ  
て

案内していただいたホステルは予約していなかったため部屋がなかった。

しかし、新たに別の宿を予約すると、オーナーが私を迎えに来てくれることになった。この時、午後10時を過ぎていた。迎えに来てくれたオーナーは、私よりひとりの女の子だった。

女の子と表現したのは彼女がちびまる子ちゃんの子じなじこ可愛らしい女性だったからである。このオーナーが、夢を追いかけてアモイに来た女の子、**乐言**である。

彼女はコーヒーマシンの魅力に感動し、将来ふるさと山東省でカフェを開くために、現在アモイでコーヒーマシンの専門的に学んでいるという。そんな彼女のこのまよひ日間泊まることになり、私は彼女の人生について言葉を交換する機会となる。

アモイに着いて二日目、昨夜の疲れも一晩で吹っ飛び、私は軽快にホステルを飛び出した。

まず最初に、廈門大学の隣の南普陀寺を訪れた。

ちよつと山を登って降りたところから直接廈門大学を見学するところだよ。」

と教えてくれた**乐言**。しかしそのちよつと山登りが一時間以上かかり、何よりメートル進びたにも虫が上から落ちた瞬間、

もしもは左右のどちらかの木に**毛虫**がぶら下がっているところだと**毛虫**を避けるのに必死だった。

これから蝶になるとはいえ、**毛虫**はやはりかい。

私はこの**毛虫**君たちのおかげで、縫うように山を登った。

登山の途中で、廈門が一望できる大きな石の上で休憩した。美しい景色に、自分はアモイに来たのだと、改めて実感した。

頂上に着くと間もなく下山し、**乐言**に言われたとおり、廈門大学の南門から大学に入った。

中国一美しいキャンパスを持つという廈門大学。一度は見てみたかった。

日差しが照りつける中、私は足を止めずに歩いた。

廈門大学は、学内の山を登っていくと湖がある。

この湖の景色は美しかった。なんといつも緑が、輝いていた。

学内とは思えない自然の美しさに、私は息を飲んだ。

こんな綺麗な大学の中に住んでいたら、毎日の湖の周りを散歩したいと思った。

広すぎる大学を歩き回り、午後3時頃には宿に帰ってきた。汗を流して、お昼寝をしたあと、**乐言**とバランダで語り始めた。人との出会いが、旅の醍醐味であることは、これまでいれながらもずっと変わらないう。わたしは彼女と人生について語り始めた。

半年前に山東省からアモイに来た彼女は、ここでコーヒーマシンの専門学校に通いつつ、友人の開設したホステルを運営し寝泊りを解決している。そんな彼女は近い過去に地元農村の小さな村の交差点で交通事故に遭い、九死に一生を得た。

ヘルメットを付ける習慣のない中国の道路は、ヘルメットが当たり前だと思つのは彼女も例外ではなかつた。

旧正月のとき彼女は親戚のおばさんの家を訪ねた。

おばさんは、欲しかったものはなにも、その値段に買わず買つてしまう癖がある。

バイクに乗ることもないおばさんは、旧正月を迎える前、お店で綺麗なヘルメットを見つけて、どうしても欲しくなり、家に持って帰ったという。

ちよびこの後日、おばさんのところを訪れた一言は、あまりにもかじかじヘルメットなの、おばさん、今日一日だけ使わせてあげてもいいよ、と言つたその夜そのヘルメットを借りて帰路に着いた。

そのおしゃれなヘルメットが、彼女の命を救うこととなるなんてそのときの一言は全く想像もしていなかつた。

地元でも事故多発の場所として有名になつたその交差点は、信号もミラーもない。彼女はいつものように気を払い、減速して交差点に入った。すると横から来たトラップのライトが眩しく彼女の目を照らした。

彼女は10メートル以上飛ばされ、全身に痛みが走るのを感じた。意識はあつたが、立ちたいけれども立てない。次に意識がはきりしたときは病室の中だった。

その交差点では過去に何度も事故が起きており、死亡事故も何件も発生している。

しかし、その改善は未だに施されていない。村の人たちは、村長の息子があの交差点で事故でも遭わない限り、この交差点は改善されないと、「と諦めてしまつたという。

そして一言はあの日、事故に遭つた。その日に限つて一番厚めの服を着ていたといつ彼女は、全身を強く打つたにも関わらず、大きな怪我はなかつた。

しかしその身体を守つた服は、スタスタに引きちぎれていた。なんとこれも、決定的に彼女の命を救つたのは、あのおしゃれなヘルメットであつた。

普段ならヘルメットを付けることのない彼女が、おばさんの賢みな習慣から手に入れたヘルメットに命を救われたのである。

返すことを約束したヘルメットだが、どうしても返すことができない状態になっていた。彼女は一月間は病院で様子を見て、退院した。

九死に一生を得た彼女は、人生について悟つたという。

彼女の話はただただ聞かされた。

そして私たちは人生について語り始めた。

90年生まれ彼女だが、周りの人達は皆結婚して子供を産んで生活をしてるという。

しかし、彼女に会つたたびに、自分の人生が楽しくない、不満を吐き出すという。



私たちは、おしゃれなヘルメットの話を、おしゃれな彼女にも話しかけた。

彼女の人生観、夢への固執、その裏にある不安。聞きながら、彼女の中に何度も自分を見つけた。

彼女と共通する自分が何度も見え隠れした。

結論は出すことはできないけれど、彼女と出会えて、「こんなに言葉を交換することができて、本当に良かった。」

一人で観光地を歩いていると、たぐさの「ことを考える。考えよ、目の前の景色がせつかあるの」「気持ちちは上海を思っていたりした。」

観光地は各地から来た人であふれ、家族連れや恋人たちが手をつなぐ姿を見るたびにさみしさすら感じた。

人の海をくぐり抜け、やっと宿に帰ってきた夜、**乐宣**とパンコンで映画を見ていた。外から帰ってきた旅人が私に笑いながら「うーん、いい映画だ。」と答えた。

「あなた上海からせつかくきて映画を見ているの?」「私は笑顔で、「ううん、ううん」と答えた。  
「気さくで明るい**乐宣**と一緒にいると、常に笑いがあり、とても楽しい。」  
そしてその日の夜、**厦門**大学に劇を見に行った。

**乐宣**と、宿で知り合った**厦門**大学の卒業生二人で見に行った。涼しくなったアモイの夜を二人で笑いながら歩いたとても幸せな時間だった。

**厦門**での4日間が過ぎ、6月11日、**重慶**へ向かうべく、朝1時にお世話になったホステルを出た。**乐宣**は私をバス停まで送ってくれた。

## この言葉から学んだこと

### 四川省 重慶の旅

英未2016年

飛行機で約一時間半、アモイから、**重慶**に着いた。

今回の旅最後の目的地である。飛行場に着くと、**長江師範学院**の学生が迎えに来てくれた。それからバスに揺られること約2時間、やっと**涪陵**にたどり着いた。

長江を挟む緑の山。

水があり、山がある。

昔の人たちがこの景色を描き、詩で歌ってきた、その美しさが目の前であった。

昔はきついで、緑がもつと澄んで、水がもつと清かったのだらう。

涪陵からタクシーに乗り、**長江師範学院**へ向かう。そしてついに、**川野**さん、**貴福**さんと再開を果たした。学部時代にお世話になった科学論研究会の先輩である**川野**さん、そして後輩の**貴福**君。「これからの4日間の**重慶**の滞在で私は一人にたくさんの迷惑をかけてしまった。」



しかし同時に、大切なことを学んだ。それは、先輩、後輩からの「言葉」であり、その「言葉」に生きる自分自身の高藤でもあった。

重慶の火鍋は真ッ赤だった。お玉を使って具をすくって、辛い調味料がその半分を占めていた。

辛いものが苦手な私は、これは大変なところに来てしまったと思った。

翌日、大学の前で朝食を取った後、川野先生の授業に出させていただいた。

そして案内された研究室に私は感動し、思わず写真をとりの続けた。

そこに並べられた日本語に関する本、日本の小説やアニメ、日本文化を紹介する本や雑誌に、川野先生と貴福先生の仕事に対する情熱と学生への愛が溢れていた。

端午節という祝日には、川野さん、貴福さん、日本語学科の学生と一緒に重慶市内へ出た。周りの話を聞いている重慶弁は上海弁と私に聞こえても新鮮で愉快に聞けた。

自然が大好きな私を、黒い白鳥のいる公園に連れて行ってくださった。

この黒い白鳥は、学生陳小玲さんのあげるとタスはすかさず食べるのに、私が湖に落ちたしたタスには見向きもしない。そんな黒い白鳥を見て、私たちは笑い合った。動物たちの瞳はいつも澄んでいて。

夜に見た重慶の100万ドルの夜景はいつも風情があった。霧が重慶の街を包み込み、町一番の夜景スポットはたぐさんの人たちが賑わった。

夜になつてから出てくるバーベキューの屋台とそれを包み込む煙、火鍋を取り囲みおしゃべりに花を咲かす人たち。人々の暮らしの拠り所とその温かさが霧とともに私にも伝わってきた。

中国。ひとつの国だが、一つ一つの地方それぞれに特徴がある。文化も方言も衣食住の適間も異なる。異なるがゆえに面白い面々を魅了する。またひとつ新しい中国を見つけた。

上海に帰る前夜、鍋を囲みお世話になった川野先輩と貴福君、陳小玲さんと言葉を交換した。そして尊敬する先輩と後輩の一人から、言葉を頂いた。

私は、ないものねだりするところが得意だ。でもそれは動機となり、ないものもあるものに、目標を現実にするきっかけとなる。

しかしいま置かれている環境で、その任期が終わらないなかで、次の飛躍を望み過ぎることは、あまりよくない。

なぜなら、私は「すらすらしかまじどがでまじい」でないから。人間一人ひとりにはそれぞれの社会的役割がある。





